

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Language of Maya Glyphs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004471">https://doi.org/10.15021/00004471</a>

# マヤ文字の言語

八 杉 佳 穂\*

## The Language of Maya Glyphs

Yoshiho YASUGI

Among the several reasons why Maya glyphs have not yet been deciphered is that the spoken language of the Classic Period (A.D. 292-909) is not well known. However, it is assumed to be close to the Yucatec group and/or the Chol group languages, since Maya inscriptions occur in the area where these are spoken.

This paper discusses the language recorded in the inscriptions, using graphical and linguistic data. I analyze first some glyphs containing graphemes T25 and T528 and then the homonymous word *kab* (earth and honey), which appears in Yucatecan and Cholan languages. The following results were obtained: (1) the syllabic graphemes T25 (*ka*) and T528 (*ku*) have not changed into *ča* and *ču*, as they have in Cholan languages; (2) the form *kab* (earth) and *čab* (honey) in Chontal, Manché, and Acalán could not be explained if the Maya glyphs recorded Cholan languages. Consequently, Maya writing of the Classic Period is closest to the Yucatecan languages.

- |                             |                        |
|-----------------------------|------------------------|
| I. はじめに                     | ii) Mac の文字            |
| II. 絵文書の言語                  | iii) Pakal の文字         |
| III. 碑文の言語                  | iv) 魚の文字               |
| (1) T528 ( <i>ku</i> ) の文字素 | v) $T526 = T25 + T501$ |
| (2) T25 ( <i>ka</i> ) の文字素  | (3) Kab を利用した言語推定      |
| i) Zec の文字                  | IV. 結 論                |

## I. は じ め に

マヤ文明の特徴のひとつに数えられるものに、マヤ文字がある。その文字を使って

\* 国立民族学博物館第4研究部

いた人々の言語は何語であったかについて、小論で考察してみたい。

マヤ文字は、最近急速に研究が進みはじめたものの、いまだに解読されたとはいえない文字である。解読するためには、解読しようとする文字を残した人々の言語を知る必要があるが、マヤ文字の言語状態を知ることは容易ではない。もちろんその文字はマヤ文字であり、マヤ人のことばを反映していることはすでに確かなのであるが、記録に残る言語資料は16世紀以降のものしかないのに対し、問題の文字資料は3世紀から出現しているからであり、また古代マヤ文明の展開した地域とほぼ同地域に現在でも約250万人のマヤ人が生活し、解読に手掛りを与えてくれているものの、彼らのもちいる言語は単一ではなく、約30の言語(方言)に分かれてしまっているからである。

それゆえ、マヤ文字の言語は何語かという問題は、まず、マヤ諸語のうちどの言語に一番近いかという問題におきかえて論ずるのが賢明である。解読が進むにつれて、何語が話され、それがどのような形で文字に反映されたかがわかるようになると思われるが、解読するためにも、現在利用できる言語資料のうち、どの言語に一番近いかを知る必要がある。

この問題については、これまでいくつかの意見が出されてきた。たとえば、16世紀の推定言語分布と遺跡の分布を比べて、 Chol 語系のことばが話されていたとする意見 [THOMPSON 1972: 24] や、それに言語年代学の成果を援用して論じた説 [KELLEY 1976: 13] などがある。しかしいずれも間接的な証拠にもとづくものでしかなく、文字の構造や読み方と言語の比較という直接的証拠にもとづく説は、これまでなかった。

そこで本論では、文字の読み方とマヤ諸語の比較という直接的証拠にもとづき、マヤ文字が使われていた時代の言語を推定してみることにする。

## Ⅱ． 絵文書の言語

マヤ文字の資料は、碑文と絵文書の二つに大きくわけることができる。文字が用いられたそれぞれの時代を、ここでは碑文時代 (292~909年) と絵文書時代 (13世紀~15世紀) ということにする。

マヤ文字の言語は低地マヤ諸語であることはもはやまちがいない。これはすでに、数字の頭字体とマヤ諸語の数体系の比較や、マヤ諸語の言語構造とヤシュチランのリンテル8のテキストの比較から導びかれている [THOMPSON 1971: 51; 八杉 1980: 170; 1982: 170-173]。

マヤ文字資料のうち、絵文書の言語は、低地マヤ諸語のなかでもユカテク語にひじ

ように近い。その証拠はすでにいくつか指摘されている。たとえば、マドリッド絵文書の103~112ページは、蜜蜂を主題にした章であるが、ここには日 Caban の文字 (T 526) が何度もでてくる<sup>1)</sup> (図



1 日 Caban  
T526



2 蜜蜂・蜂蜜  
[マドリッド絵文書, 105ページ]

図1 文字素 T526 と「蜜蜂, 蜂蜜」の文字

1-1)。ユカテク語の kab には「蜜蜂, 蜂蜜」の意味があり、蜜蜂または蜂蜜を意味する文字としてその文字が使われていることは疑いようがない (図1-2)。kab には「大地, 世界」という意味もあるが、それを意味する用法は、ドレスデン絵文書やマドリッド絵文書に多くみられる。また、絵文書の文字テキストばかりでなく、それに付随する絵図にも、大地や蜜の表象として T526 は生起している。日 Caban の文字として T526 は用いられるばかりでなく、大地 (kab) と蜜蜂, 蜂蜜 (kab) を表わす文字の主字としても用いられていることから、絵文書の文字はユカテク語で書かれたと考えられるわけである<sup>2)</sup>。

今挙げた例の文字の使い方は、いわゆる判じ絵式 (rebus fashion) であり、ユカテク語ではじめて解けるものである。そしてその文字はユカテク語の単語を表わしているので、表語文字とすることができる。

絵文書の文字がユカテク語で書かれた証拠となる表語文字は kab の他にも挙げることができる。たとえば、k'in (日, 太陽) の文字である。この文字は、イニシアル・シリーズでは日の文字として生起するが、月 Yaxkin や東 (lak'in), 西 (čik'in) の文字の文字素としても、また、k'intunyaabil と Thompson が読んだ文字の文字素としても生起する (図2)。

先にあげたように東は lak'in (lik'in) というが、文字と比較すると、東の文字は la と k'in と il(?) という文字素からできていると仮定できる。T534 を la と読む読み

1) 本論では、暦の日と月は慣用表記に従っている。古典ユカテク語では、[k] は c, [k'] は k と書かれるので、日 Caban の場合は、音声表記すると [kaban] となる。また [š] は x, [š'] は z と書かれるので、のちに挙げた月 Yaxkin は [yašk'in] であり、月 Zec (Tzec) は [sek] である。なお、文字 (素) には T526 のように番号がつけられているが、これはトンプソンの文字カタログの番号である [Thompson 1962]。

2) 文字とは、文字素の一定数の集合体で、ある決まった意味をもつ場合につかう用語とする。文字は文字素からでき、文字素は文字素性からできているものとする。たとえば、図1-2の文字は、「蜜蜂, 蜂蜜」という一定の意味を表わすものであり、二つの文字素からできている。マヤ文字は、ふつう大きな文字素に小さな文字素がついてできている。大きな文字素をここでは主字といい、それにつく小さな文字素を接字ということにする。

マヤ文字には、ふつう二つの等価の変体 (異体) がある。一つは人間や動物の横顔を描いた文字であり、もう一つは、幾何的、抽象的な文字である。前者を頭字体といい、後者を幾何体ということにする。

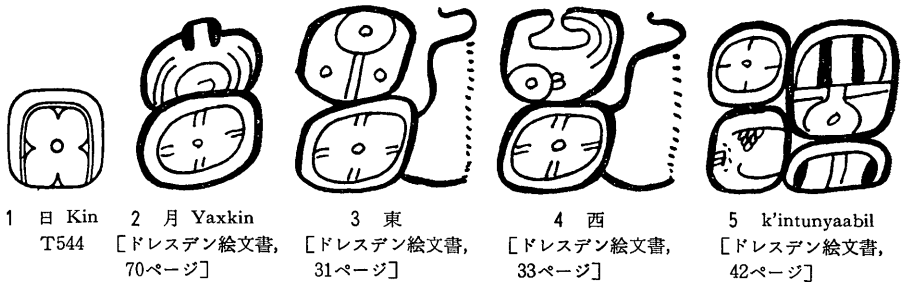


図2 文字素 T544 (kin) とそれを含む文字

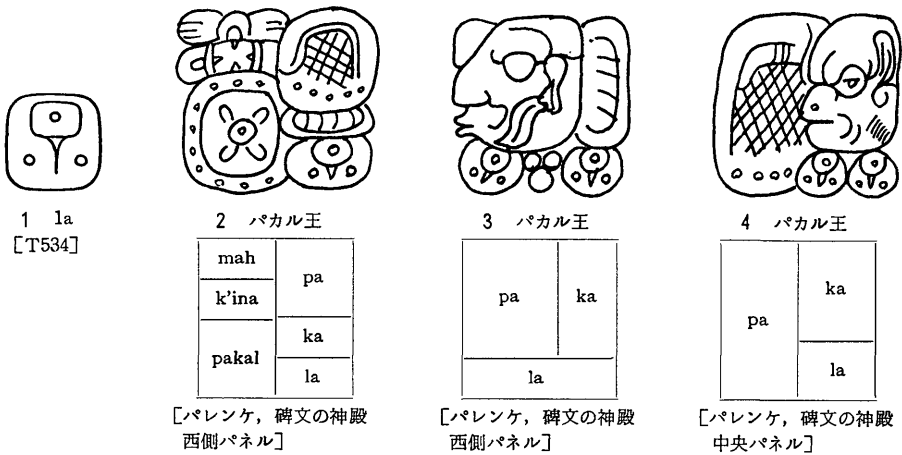


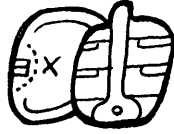
図3 T534 (1a) とそれを含む文字

方は、パレンケの王パカル（603～683年）の名前の文字表記からも正しいことが裏付けられる。図3のようにパカル（Pakal=楯）は、楯の文字ばかりでなく pa, ka, la の表音文字でも表わされている（図3）。ここで図を説明しておく、図3-2では、左下に楯（pakal）の表意文字がみられ、右側には pa, ka, la の表音文字が添えられている。図3-3は、その pakal という表音表記の pa を頭字体にかえた例であり、図3-4は、ka を頭文字にかえた例である。

今みたように、マヤ文字には、表語文字のほかに表音文字として音節文字がある。音節文字を使って絵文書の言語がユカテク語に近いことを示せる例は、他にも挙げる事ができる。たとえば、数11はドレスデン絵文書の19ページ上段（D 19a）では、図4-1のように書かれている。11はユカテク語で buluk であるので、11を表わす文字の3つの文字素は、それぞれ bu と lu と ku と仮定できる。図4-2は七面鳥を表わす文字である。二つの文字素からできているが、左の文字素は、さきほど仮定した ku の文字素である。七面鳥はユカテク語では kuφ であるので、右の文字素は φ(u) と



1 11 (buluk)  
(bu)-lu-ku'



2 七面鳥 (kuϕ)  
ku-ϕu



3 犬 (ϕul)  
ϕu-lu

[ドレスデン絵文書, 19ページ] [ドレスデン絵文書, 30ページ] [ドレスデン絵文書, 13ページ]

図4 「11」と「犬」と「七面鳥」の文字

仮定できる。図4-3は犬を表わす文字である。この文字はすでに述べた ϕ(u) と lu と仮定した文字素からできているが、ϕul には「犬」という意味がある。それゆえ、3つの文字は、ユカテク語で読んでなんら矛盾はない。

Knorozov は、ユカテク語の主形態 CVC は CV+CV で書かれるとした (Knorozov 1967: 34-51)。Knorozov の解釈に筆者は疑問を感じるのであるが、先に述べた3つの文字における相互補完性は、Knorozov の正しさを、この場合は証明している。

今述べた4つの文字素のうち、lu と ku はランダのアルファベットと称される文字に入っている。それゆえランダのアルファベットからも、その正しさは裏付けられる。

ランダのアルファベットと称される文字は、16世紀中葉にスペイン人神父 Diego de Landa が残した『ユカタン事物記 (Relación de las cosas de Yucatán)』の中にある。その『ユカタン事物記』には、ランダのアルファベットと称されている27の文字のほかに、音節的な文字の使用例が3つと月日の文字がそれぞれ読み方を添えて記されている。マヤ文字に音価が記されている例は、月日の文字を記した若干の例を除いて他にはなく、それゆえ、Landa の残した文字は、マヤ文字の解釈に欠かすことのできないものであり、マヤのロゼッタ石にたとえられることさえある。

音節文字は、Landa の残したいわゆるアルファベットや暦の文字のなかにたくさんみつけることができる。絵文書の文字には、それらの音節文字素を含んだものがあるが、Landa が与えていた読み方で読むと、文字の読み方、意味ともユカテク語で理解できる場合がいくつもみつまっている。それゆえ、音節文字を手掛りにしても、絵文書はユカテク語そのものであるといえないにしても、ひじょうに近いといえるのである。

ユカテク語にひじょうに近いという証拠は、のちにもう少しちがった角度からも述べることにする。

### Ⅲ. 碑文の言語

本論の目的は、碑文時代の言語がマヤ諸語のなかでも何語に近いかを探ることである。

碑文の言語は低地マヤ諸語であることについてはすでにふれた。ところが低地マヤ諸語は、言語分類表でもわかるように、ユカテク・グループ、 Chol・グループ、ツェルタル・グループの3つに分けることができる(表1)。このうちツェルタル・グループは、動詞核の分布が前二者と異なっている[八杉 1980: 141-149]。絵文書の文字はユカテク語にひじょうに近いといえたのであるから、ツェルタル・グループは考察から除外して、これからの論を進めることにする。

そうすると、碑文時代の言語状況としては、次のような場合が考えられる。

- ①ユカテク・グループと Chol・グループの方言差はなかった。
- ②現在ユカテク・グループと Chol・グループに分けられているが、それと同じような方言差がすでに存在していた。この場合、マヤ文字の言語は、
  - ②-1 ユカテク・グループの言語に近かった。
  - ②-2 Chol・グループの言語に近かった。または、
  - ②-3 方言差がマヤ文字の言語にもあった。

表意文字や表語文字から、文字の読み方を探ることはむずかしい。たとえば、「蜜蜂」を表わす文字があるとしよう。それを kab と読もうと čab と読もうと、なんら問題はない。数字や漢字の例を挙げるまでもなく、文字の読み方は直接おもてには現われない。

ユカテク・グループと Chol・グループを分かち指標は、語彙レベルでは k:č と č:t の対立である。そこで、k の音をもつ文字素 T25 と T528 をもとに、表音文字によって表記された文字について考えていくことにする。なお両文字素とも Landa の残した文字であり、ka と ku の音価が Landa により与えられている。

#### (1) T528(ku) の文字素

まず、ku の音価をもつ文字素 T528 を利用した表音的構成の文字をみることにする(図5)。

数11は、絵文書では bu-lu-ku と書かれていた。表現を簡単にするため、Chol・グループの代表として Chol語を例にとることにする。Chol語では数11を buluč と

表1 マヤ諸語の分類

		言	語	人	口
低地マヤ諸語	北グループ	I. ワステク・グループ			
		1.	ワステク (Huastec)	50,000	
		2.	チコムセルテク (Chicomuceltec)	0	
		II. ユカテク・グループ			
		a.	ユカテク (Yucatec)	443,000	
	b.	ラカンドン (Lacandón)	300		
	c.	イツァ (Itzá)	500		
	d.	モパン (Mopán)	5,000		
	南グループ	III. チョル・グループ			
		1.	チョルティ (Chortí)	32,000	
2.		チョンタル (Chontal)	20,000		
3.		チョル (Chol)	65,000		
IV. ツェルタル・グループ					
1.	ツェルタル (Tzeltal)	100,000			
2.	ツォツィル (Tzotzil)	65,000			
3.	トホラバル (Tojolabal)	10,000			
高地マヤ諸語	西グループ	V. カンホバル・グループ			
		1.	チュフ (Chuj)	21,000	
		2. a.	ハカルテク (Jacaltec)	27,000	
		b.	カンホバル (Kanjobal)	43,000	
		c.	アカテク (Acatec)	18,000	
	3.	コトケ (Cotoque)			
	VI. マム・グループ				
	1. a.	テコ (Teco)	7,000		
	b.	マム (Mam)	321,000		
	2.	アグアカテク (Aguacatec)	13,000		
VII. イシル (Ixil)		46,000			
VIII. ケクチ (Kekchí)		209,000			
東グループ	IX. ポコム・グループ				
	a.	ポコムチ (Pocomchi)	61,000		
	b.	ポコマム (Pocomam)	42,000		
	X. キチュエ・グループ				
	1.	ウスパンテク (Uspantec)	2,000		
	2. a.	シパカペニョ (Sipacapeño)	3,000		
	b.	サカプルテク (Sacapultec)	3,000		
c.	アチ (Aché)	35,000			
d.	キチュエ (Quiché)	500,000			
e.	ツトゥヒル (Tzutuñil)	42,000			
f.	カクチケル (Cakchiquel)	271,000			

[八杉 1980: 125] による  
(一部表記を変更)





T528

図5 文字素 T528 (ku)

いう。もし絵文書が Chol 語で書かれたものであれば, T528 (ku) ではなく, ču の音価をもつ, たとえば T601 のような文字素を使ったであろう。そうではないということは, Chol 語ではなく Yucatec 語だとみなすことができる。もちろん k > č の変化が絵文書時代以後のことなら, Chol 語ではないとはいえない。この問題についてはのちに論ずることにするが, その可能性はほとんどないことだけを先にここで述べておく。

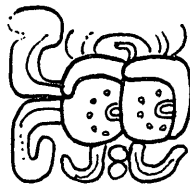
T528 (ku) による表音表記は, 碑文時代にもみることができる (図6)。図6-1 は ナランホの「ひげリス王」の文字である。これを石碑 20 では, 図6-2 のように, T528 を2つ重ねて表わしている (GRAHAM & VON EUW 1975; KELLEY 1976: 240)。リスは Yucatec 語で kuk という。それゆえこれは, リスを T528 (ku) でもって表音的に表記した文字とみなすことができる。ところが, Chol 語ではリスを čuč という。これまた k は č にかわっていないので, Chol 語ではないという結論になる。マヤ文字の言語が Chol 語であるとするならば, k はまだ口蓋化していなかったとみななければならない。

(2) T25 (ka) の文字素

次に, ka の音価をもつ T25 をみてみよう (図7)。T25 はこれからの考察に大切

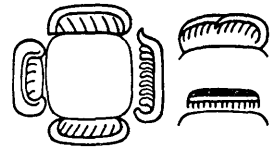


1 ナランホの「ひげリス王」  
[ナランホ, 石碑 23]



2 ナランホの「ひげリス王」  
[ナランホ, 石碑 20]

図6 ナランホの「ひげリス王」の文字



T25

図7 文字素 T25 (ka)



1 月 Zec

[ドレスデン絵文書, 50ページ]



2 月 Zec

[パレンケ, ハウスA]



3 ランダのアルファベットの c

図8 月 Zec の文字とランダのアルファベットの c

な役目を果す文字素なので、T25 が ka の音価をもつ文字素であることの証明から始めることにする。

T25 は、先に述べたようにランダのアルファベットでは ca[ka] と書かれている。それゆえ ka の音価をもつとみられるのだが、その読み方は、月の文字 Zec や Mac の分析から、正しいことがわかる。

月 Zec は、絵文書では3度生起し、そのうち2度は同じで、2つの文字素からできている(図8-1)。Zec の主字はランダが与えた c の文字とみることができる(図8-3)。ランダは a, b, c をアー, ベー, セーとスペイン語式に読んでいき、インフォマントはそれらの音をもつ文字を書いていったとみられるところから、ランダの c の文字は、[se] という音価をもつと考えることができる。CVC は CV+CV で書かれるというクノロゾフの原則と、月 Zec の呼び名と文字の構成の比較から、月 Zec は se-ka と書かれているとみなすことができる。

月 Mac も同様、ma と ka の文字素で書かれている。絵文書には2つの形が現われる(図9-1, 2)。この場合、注釈が必要であろう。図9-1は ma-ka であるが、図9-2は、ma(T74) と亀(ak) の文字からできているので、ma-ak と書かれているとみることができる。この例から、CVC は CV+VC で表わされてもよいことがわかる。T74は Landa がすでに与えている文字である。それでは図9-1の主字(T557)がなぜ ma と読まれるかといえば、ドレスデン絵文書(D25a-D28a)に、図9-3, 4のような文字がみられるからである。生起場所の分析から、同じもの(u mam)の書き方を変えて表わした文字であることがわかるので、T74=T557, すなわち、T557は ma と読めるのである。

以上、Zec と Mac の月の文字から、T25 は、Landa が与えた音価どおり ka という音価をもつ文字素であることが確かめられた。

T25 が碑文時代にも ka と読まれていたことは、次の5つの例から納得いくであろう。

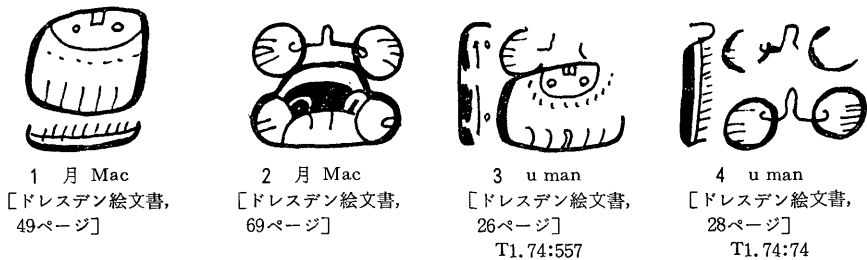
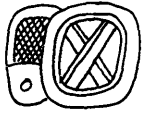
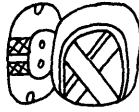


図9 月 Mac と u man の文字



1月 Uo  
[ティラ, 石碑C]



2月 Zip  
[ナランホ, 階段碑文]

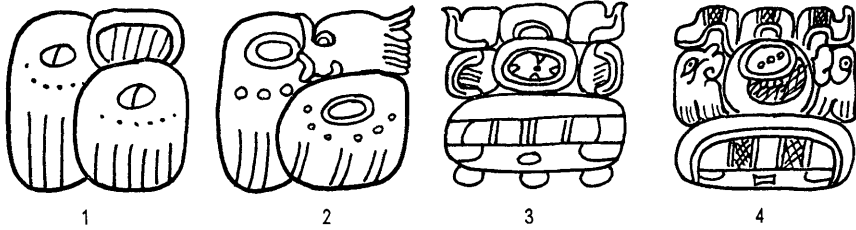
図10 月 Uo と月 Zip の文字

i) 月 Zec の文字は、碑文では絵文書に現われる形と逆の構成になっている(図8-2)。音声表記すれば、ka-se-X となる(KELLEY 1976:176)。オリジナルは Chol 語の暦とみられているが、Gates のコレクションのカatalogではケクチ族の暦とし

て記載されている暦では、Zecの月を Cazeu という(THOMPSON 1932)。Thompson はその暦がケクチ族ではなく、もとは Chol 族のものであったという直接の根拠を yaš にもとめている。ケクチ語では yaš を raš というからである。Thompson はそれしか挙げてないが、その暦が Chol 語とみられる証拠は、以下のように他にも挙げることができる。コカテク語で Uo と Zip にあたる月を、その暦では Icat, Chacc<sup>ə</sup>at という。このことばは、Uo と Zip の文字との比較から、黒+cat, 赤+c<sup>ə</sup>at と分析できる。文字の接字は、黒と赤であり、現代 Chol 語では、黒を i'ik', 赤を čəčək というからである(図10)。čəčək は čək の重複形である。ə の音が表記されるようになったのは最近のことであり、以前は ə の音は a と区別されず、a と表記されていた。それゆえ、文字の構成からみて、碑文時代の月 Uo と Zip は、Ik'-k'at (または Ik'-kat), Čak-k'at (または Čak-kat) であったと思われる。ところがケクチ語では黒を q'eq といい、赤を kaq という。したがって、ケクチ語ではないということができる。

この暦が Chol 語であるとする、文字の読み方は ka-se-X であるので、ka は口蓋化していない。kaseu が音韻変化して časeu にならなかったのは、それが暦であるからであろう。260日暦は13の数と20の日の組み合わせで260日が一周期となる暦であるが、グアテマラ高地のイシル族では、13の数と20の日は別々の神官により保持され、神聖なもの、または神として崇められていた(LINCOLN 1942:106-107)。この例からもわかるように、暦は神聖化され、特別に守られるものであったので、音韻変化をうけなかったと思われる。

月 Zec の場合と同様、Uo と Zip の月の文字も、Chol 語とみた暦で解釈できた。Chol 語とみられる暦から文字の構成がこのように理解できたわけであるが、これは Chol 語が碑文時代の言語であった可能性を示す証拠の一つに数えられるかもしれない。しかし、このような例だけで碑文時代の言語が Chol 語であるということにはならない。暦の月の文字をよりよく説明できる例は、ユカテク語の場合 Pop, Zotz', Yaxkin, Mac, Pax と少なくとも5つは数えられ、Chol 語の場合より多いからである。それゆえ、この場合、単に Chol 語の暦に碑文時代の読み方が残存したとみるの



[ボナンバック, 石碑2] [ヤシュチラン, リンテル2] [コパン, 階段碑文] [ピエドラス・ネグラス, リンテル3]

図11 T25 と T203 (魚) の交替例

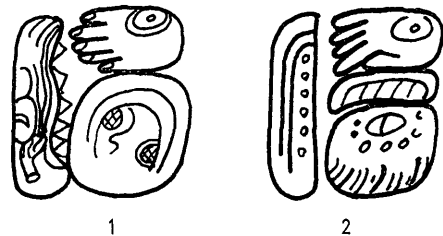
がふさわしいのではなからうか。

ii) 碑文時代にも月 Mac が, ma-ka と ma-ak という書き方で表わされている場合がある。ka は T25 で表わされているので, 碑文時代でも T25 は ka であったことがわかる。

iii) パレンケのパカル王についてはすでにふれたが, パカル王の文字の表音表記 ([pakal] を pa-ka-la と表記) にも, T25 は ka の音価をもって生起する。

iv) T25 は, 碑文時代に, 魚の文字素と交替する例がある (図11)。魚の一般名はユカテク語では kay である。魚の kay は語頭音に ka を持つので, ka の音価を有する T25 と交替しえたと解釈できる。ところが, チョル語では魚は čəy である。k は口蓋化してčに変わっている。それゆえ, チョル語ではないと, ひとまず考えることが可能である。しかし, もしチョル語であったとしたら, ka は口蓋化せずにそのままであったと考える必要がある。

v) パレンケの十字グループの碑文の比較研究から, 図12の文字は同じ文字の異形であることがわかった (LOUNSBURY 1980: 112-114)。両方の文字の左につく接字 T204 と T11 は, カウント・グループと呼ばれる同価の文字素である (THOMPSON 1971: 186)。図12の1の文字の主字は, すでに述べた T526 (kab) である。それが図12-2 では, T25 (ka) と T501 で書かれている。それゆえ, これは ka-ba と書いて kab を表わそうとしたものとみなすことができる。そうするとここでも T25 は ka と読めることが確かめられる。T501 を ba と読むことはすでに提案



	217
204	526

	217
11	25
	501

[パレンケ, 葉の十字の神殿] [パレンケ, 十字の神殿]  
T204. 217:526 T11. 217:25:501

図12 T526 と T25:501 の交替例

されていたが、推測の域を超えなかった (KELLEY 1962: 306-307)。しかしこれにより、T501 は ba と読める証拠が得られたことになる。

ka と ku の音価をもつ文字素の検討から、ka, ku は口蓋化していないことがわかった。ユカテク・グループと Chol・グループの分類指標は k : t であるので、碑文の言語は Chol・グループの言語ではないと考えられる。つまりこの分類指標を使う限り、先にあげた4つの可能性のうち、Chol・グループの言語に近かった (②-2) と方言差がマヤ文字の言語にもあった (②-3) という場合はなくなる。それでも、方言差はなかった (①) とユカテク・グループの言語に近かった (②-1) の2つの可能性が残ることになる。そこでもう少しちがった角度から考察することにする。

### (3) kab を利用した言語推定

v) の例は、一般名詞 (kab) を表わす場合にも表音表記が用いられうることが示せた最初の例である。マヤ文明の最盛期であり、マヤ文字がもっとも多く用いられ、また発達した時期は600~800年であるが、この例は、ちょうどその中間に位置するものである。しかもその例がみつかったパレンケという遺跡は、言語分布図からみて Chol 地域内に含まれるため、これからの考察にひじょうに都合がよい。それゆえ、この kab を使い、碑文時代の言語について、さらに考えてみることにする。

kab には「大地」と「蜜蜂、蜂蜜」の意味があることはすでに述べた。Lounsbury は図12の文字を誕生を表わす文字とみ、kab を「大地、世界」の意味にとっている (LOUNSBURY 1980: 113)。

表2 「大地」と「蜜」の語彙

言語名	大地	蜜	出典
Yucatec	kab/lu'um	kab	Barrera Vásquez (1980)
Lacandón	lu'um	kab	Bruce (1968)
Itzá	lu'um	kab	Schumann (1971)
Mopán	lu'um	kab	Ulrich & Ulrich (1976)
Chortí	rum	čab	Oakley (1966)
Chontal	kab	čab (brown sugar)	Keller (1955: 263) Keller (1959: 46)
Chol	lum	čab	Aulie & Aulie (1978)
Manché Chol (Choltí)	kab/lum	čab	Samilus (1975) García de León (1979)
Acalan	kab	čab	Smailus (1975)
Kekchí	č'oc'	kab (panela, dulce)	Haeserijn V. (1979)
Quiché	ulew	kab (panela)	Henne Pontious (1980)

表3 音韻対応表

高地マヤ諸語	低地マヤ諸語	
	ユカテク・グループ	Chol・グループ
q	k	k
q'	k'	k'
k	k	č
k'	k'	č'

そこでまず、ユカテク・グループと Chol・グループではそれらのことばをなんと  
いうのかみることにする。

表2中のマンチュ・ Chol語とアカラン( Chontal)語はともに死語である。マン  
チュ・ Chol語の語彙の典拠は、1695年の Moran の辞書であり、アカラン語の語  
彙は、1612年に書かれたといわれるパシュボロン文書からとりだしたものである。そ  
の両者、ならびに Chontal語では、「大地」は kab であり、「蜜」は čab である。

高地マヤ諸語の q, q' は、低地マヤ諸語では、ユカテク・グループ、 Chol・グル  
ープとも k, k' に対応する。それに対し、高地マヤ諸語の k, k' は、ユカテク・グル  
ープでは k, k' に、 Chol・グループでは č, č' に対応する(表3)。

この関係とマンチュ・ Chol語、アカラン語、 Chontal語の kab, čab と、ユカ  
テク語の kab, kab から、

大地 \*qab > kab (ユカテク) : kab (マンチュ・ Chol, アカラン, Chontal)

蜜 \*kab > kab (ユカテク) : čab (マンチュ・ Chol, アカラン, Chontal)

という形を想定できる。しかしながら、高地マヤ諸語では、「大地」を ulew, č'oč',  
ak'al, lu'um などといい、 qab ということばをもつ言語は、筆者の知る限り、高地マ  
ヤ諸語にはない。それゆえ \*qab (大地), \*kab (蜜) という仮定は、高地マヤ諸語を  
みていただけでは正しいかどうかわからない。ところが、言語的にも地理的にもかな  
り離れているワステク語では、「大地」を čaba:l という(LARSEN & PIKE 1949: 268)。  
この čaba:l は、ユカテク語で「大地」を表わす kab と同源であると思われる。ワス  
テク語では、高地マヤ諸語の q, q' は k, k' に対応し、 k, k' は č, č' に対応するので  
(McQUOWN 1955: 503-509), 「大地」は \*kab であり、ワステク語では \*kab >  
čab-a:l となった。つまり、大地を表わすことばは、祖語では \*qab ではなく、 \*kab  
であったと解される。「大地」の祖語形は \*kab と想定できたので、大地を \*qab,  
蜜を \*kab とする仮定はまちがいであり、この場合について、マヤ文字の言語が何語  
に近かったか論ずる必要はないと思われる。しかし仮定のもととなったワステク語の

čaba・l を kab と同源とみない場合でも、 Chol・グループがマヤ文字の言語ではないことは、以下のことから証明されるであろう。

絵文書では、日 Caban の文字、「大地」、「蜜」の文字とも同じ文字素 T526 が用いられているので、それらは同じことば、すなわち kab であったとみなすことができる。ところが、マンチュ・Chol語とアカラン語の語彙からわかるように、少なくとも17世紀には「大地」は kab、「蜜」は čab になっている。それゆえ、絵文書が Chol・グループのことばで書かれたとするには、マドリッド絵文書の製作年代の15世紀よりあとにその変化がおこらなければならない。そして17世紀のはじめまでには完了していなければならない。しかも、碑文時代、すでに \*q は k に変わっているはずであるが、\*q が k になったあとも、\*k > č の変化はおこらず、\*q から変化した k と、\*k がそのまま変化しない k の2つが並存していなくてはならない。

	碑文・絵文書時代 (? - 7世紀 - 15世紀)		マンチュ・Chol, アカラン (17世紀)
大地 *qab >	kab	>	kab
蜜 *kab >	kab	>	čab

この並存現象はユカテク・グループにみられるもので、なんら問題ない。しかしマヤ文字の言語が Chol・グループの言語であるためには、この並存状態が少なくとも8世紀続いたのち、来歴のちがう k、つまり \*k からの k だけが選りすぐられて口蓋化した、とみなくてはならない。このような現象がおこりうる可能性はまずないとみられるので、マヤ文字の言語は Chol・グループではないとみなすことができる。

ワステク語の čaba・l が大地を表わす kab と仮りに同源でない場合を考察しても、マヤ文字の言語は Chol・グループではないとみなすことができたが、今の結論は、絵文書時代のことばが Chol・グループのことばであったならという仮定から導かれたものである。絵文書のことばが Chol・グループでなくても、碑文が Chol・グループの言語を反映している可能性はある。とはいうものの、文字の一致から、碑文が Chol・グループで、絵文書がユカテク・グループであるとは考えられない。考えられる可能性は、現在 Chol・グループとユカテク・グループの方言差があるように、同じような方言差が碑文時代にもあったということだけである。この場合、「大地」は \*qab > kab になっているのだから、「蜜」は \*kab > čab になっていると予想される。現在のところ、「蜜」を表わす文字は碑文に見出されていないが、Chol・グループのことばであるためには、「蜜」が čab と記されている例を見つける必要がある。しかしながら、大前提である \*qab (大地) が否定されるのであるから、そのような可能性の少ない発見を待つ必要はないであろう。

そこで、「大地」を表わすことばとして、\*qab がない場合、つまり、「大地」、「蜜」とも \*kab である場合を考えることにする。

「大地」を kab といわない言語では、表2からわかるように、lum (lu'um, rum) という。ユカテク語にも lu'um がある。もし碑文時代に kab を表わす文字 (T526) がなければ、低地マヤ諸語では \*lum があり、のちに kab が導入されたとみることができる。しかし、kab がおそらく「大地」の意味で、すでに碑文時代に使われている例をみることができた (パレンケの十字グループのテキストは7世紀の終り頃のものである)。また、言語的にも地理的にも離れているワステク語で「大地」を  $\phi$ aba·l ということから、kab が「大地」の意味で古くから使われていたことは確かである。それゆえ、碑文時代の言語に \*lum があり、のちに kab が導入されたとみことはまちがいであることがわかる。

そうすると、碑文時代には、「大地」を表わすことばとして、

- ① kab と lum があった。
- ② kab だけしかなかった。

の二つの可能性しか考えられない。

どちらの場合でも「蜜」を表わす kab はあったと思われる。というのもワステク語で「蜜」を表わすことばは、McQuown によると、ないが、「パイナップル」を意味することばに  $\phi$ ab があるからである (McQuown 1955: 508)。これは \*kab から変化したことばと思われる。kab が「蜜」の意味から「黒砂糖、あまいもの」の意味になっている言語があるので、ワステク語の  $\phi$ ab も、蜜>あまいもの>パイナップルという意味変化をおこしたものと考えられる。そう考えると、ワステク語にも、ユカテク語と同じように、「大地」(\*kab> $\phi$ ab-a·l) と「蜜」(\*kab> $\phi$ ab) という、同じことばで二つのちがった意味を表わす語彙があったとみることができる。

まず、①の kab と lum があった場合を検討することにしよう。

Chol語と Cholティ語では「大地」を表わす kab はすたれた。しかし、Chontal語、マンチュ・Chol語、アカラン語では残ったと考える必要がある。しかし、「蜜」を表わす kab は čab に変化しているので、当然「大地」を表わす \*kab も čab に変化していなくてはならないはずである。「大地」、「蜜」とも \*kab を仮定した場合であるから、Chontal語等で、「大地」が kab、「蜜」が čab となることは、音韻法則からみて考えにくい。

②の kab ということばしかなかった場合、新しいことば lum が入ってきて、Chol語や Cholティ語では kab におきかわり、kab はすたれてしまった。しかし、Chol



ンタル語、マンチュェ・チョル語、アカラン語では、そのまま残った。このように考えることができる。しかしながら、音韻法則からみて、「大地」の\*kabだけが変化しない環境はみつけることができない。

そうすると、①、②のどちらの場合でも、チョンタル語、マンチュェ・チョル語、アカラン語にみられる「大地」を表わす kab は、借用とみななければならない。それも \*k > č への口蓋化がおこったあとの借用とみななければならない。ユカテク語の kab (蜜) はチョル・グループでは čab となっているように、k はチョル・グループすべてにおいて、規則的に č に対応するからである。

17世紀のはじめには、マンチュェ・チョル語やアカラン語にみられるように、「大地」は kab であるのに対し、「蜜」は čab に変わっていた。絵文書は、「大地」、「蜜」とも kab であるので、絵文書がチョル・グループの言語で書かれたとするためには、15世紀から16世紀の間に kab > čab (「蜜」) にかわり(そのさい、「大地」も čab になるはず)、kab を失なったので、ユカテク語から「大地」を意味する kab をふたたびとり入れた。このような不思議な現象が、しかも2世紀たらずの短期間におこるのであるうか。

文字の連続性から、碑文時代がチョル語で絵文書時代はユカテク語であるということとはできない、とすでに述べた。しかし、先ほど述べたように、碑文時代、ユカテク・グループとチョル・グループの方言差があり、絵文書時代はユカテク語だけが文字の言語として残った、または絵文書はたまたまユカテク語のものだけが残った可能性はある。この場合、「蜜」を表わす kab は čab に変わり、そのさい、「大地」の kab はすたれた。そのあと、チョンタル語、マンチュェ・チョル語、アカラン語では、ふたたび kab が「大地」の意味で導入された。先に述べたことと同じことがおこる必要がある。だが、今度は、9世紀から16世紀の間に起こればよい。しかし7世紀あまりの時間的幅ができたからといって、そのようなことが果しておこるのであるうか。マヤ文字の言語をチョル・グループとみると、このように矛盾が生ずる。

表2の、言語によって「大地」の語彙がちがう現象をうまく説明しようと思えば、チョル・グループでは「大地」は lum であったとみればよい。「大地」を lum という言語は、ほかにツェルタル・グループとチュフ語がある。おそらくそれらのうちのどれかから lum が広がっていき、kab を侵略していったのであろう。ユカテク語で kab と lum が並存しているのは、北端に位置するからではなかろうか。マンチュェ・チョル語、チョンタル語、アカラン語の kab は、k > č の音韻変化がおこったのちにユカテク語から導入されたにちがいない。

つまり、マヤ文字の言語が Chol・グループの言語でないとする、表2にみられる語彙の不思議な現象はうまく説明できるのである。しかしながら、言語現象は複雑であり、この一例だけでもって、マヤ文字の言語はユカテク・グループの言語に近かったという結論をひきだすのは危険であろう。たとえば、碑文時代に方言差があったという意見がある。方言差があったと推定されている理由は、16世紀の推定言語地図ならびに現在の Chol・グループの分布と、遺跡の文字からである。

マヤ族は少なくとも2000年以上、同地域に住んできた。メソアメリカの他文明と比較すると、それはマヤ文明の特徴のひとつに数えられるほど、彼らは移動を好まず、一カ所に定住してきた。それゆえ、分布図から1000年近くも前のことを論じるのは危険であるにもかかわらず、碑文時代は16世紀と同じような言語分布であったとかなり確信をもって論じられてきたのである。

それは文字からも支持されている。Chol・グループの住む地域にある遺跡、パレンケやヤシュチラン、コパン、キリグアでは、ペテン中心部でない「期間の終り」を表わす「さかさコウモリ」の文字や全身像による時間表記、819日暦などが存在するからである。

とはいうものの、これらの文字は言語のちがいを反映したのではなく、単なる地方的な変異または流行によるものと解釈することも可能である。それゆえ、たしかにどちらも考えられうる意見であるが、方言差があった確たる証拠にはならない。方言差があったかどうかを論じるには、やはり文字の読みと言語の比較からせまらなくてはなるまい。

#### IV. 結 論

マヤ文字の言語が何語であったかを知る手掛りとして、本論では、現存するマヤ諸語のうちどの言語にマヤ文字の言語は近いかを探ることにした。

まず、ユカテク・グループと Chol・グループの分類指標である k : ɔ̃ の対立を利用した。k の音をもつ文字の分析から、\*k は k のままで、口蓋化して ɔ̃ にはなっていないことがわかった。しかし \*k > ɔ̃ の変化が、文字以降のことであるならば、その分類指標を使って、どちらのグループの言語がマヤ文字の言語に近いかを知ることはいできないという問題が残った。すなわち、Ⅲの(1)、(2)の分析からは、ユカテク・グループと Chol・グループの方言差はなかった。またはユカテク・グループの言語に近かったという結果しか得られなかった。

そこで、同じくk音をもつ kab という文字の分析であるが、kab の意味である「大地」と「蜜蜂、蜂蜜」を表わす語彙が、各言語ごとに異なることを利用して、考察してみた(Ⅲ-3)。その結果、マヤ文字の言語が Chol・グループの言語であることは否定され、したがって、ユカテク・グループの言語に近いということが得られた。

正書法が確立されたあとで言語が変化することはよくあることであり、マヤ文字の言語が何語かという結論を得るには、\*k 以外の音をもつ語彙と文字の分析や、マヤ文字とマヤ諸語の統辞構造の分析など、いろいろな角度から考察しなければならないことはいうまでもない。それゆえ、ここでおこなった少数の検討例から、マヤ文字の言語はユカテク・グループの言語にもっとも近いと結論づけることは危険であることは十分承知している。しかしマヤ文字はまだ解読されていない文字であるので、一番必要なことは、マヤ文字の言語はどの言語に近かったかの見当をまずつけることである。その点からいえば、マヤ文字の言語がユカテク・グループの言語に近いとしたら何ら問題はなかったのであるから、マヤ文字を解読するために一番手助けになる言語は、ユカテク・グループの言語、そのなかでも特にユカテク語であるということができる。資料の面からも、ユカテク語を中心にすすめるのが賢明である。というのも、Chol・グループの言語に関する資料は少ないのに対し、ユカテク語の資料は16世紀から今日に至るまで、マヤ諸語のなかでももっとも多いからである。

もちろん、他のマヤ諸語も必要である。ユカテク語では消えて、他の低地マヤ諸語に残っていたことばで解読できる場合は、Uo や Zip の月の文字を解釈したときにすでにみえてきた。マヤ文字の言語が高地マヤ諸語から遠くはなれているとあって、それも無視することはできない。T740 が「誕生」を表わす文字であることが証明でき、\*pok' (<\*poq') と読まれうることがわかったのは、高地マヤ諸語のポコムチ語やキチュ語に残っていた poq'- からであった (cf. [BARTHEL 1968: 134-135; 八杉 1982: 84-85])。

ユカテク・グループの言語にもっとも近いと考えられたのであるから、解読にはユカテク・グループの祖形を利用すればよいという考えも成り立つかもしれない。しかし、それをもって解読作業にとりかかるのはよくない。というのも、先に述べたように、ユカテク・グループではすでに消えてしまったことばもあるからであり、また、碑文時代の言語が理論的に再構成した祖形と一致するとは限らないからである。もちろん祖形を知っておくことはむだではない。しかしそれ以上にたいせつなことは、どのようにマヤ諸語が変化してきたかという知識である。たとえば、ユカテク語の k は \*q と \*k の両方に由来するといった知識である。そのような知識があれば、音価の適

用の範囲がわかるであろうし、もし音価が得られたのであれば、言語変化のある段階を知り得たのであるから、その状態にあわせてマヤ文字の言語を再構することができるであろう。

それゆえ、解読はユカテク語を中心に進めてゆけばよい。これが本論で得た結果であるが、それと同時に、マヤ諸語の変化の法則も知っておく必要があるし、また、ユカテク語では消失してしまったことばもあるのだから、たえず他のマヤ諸語に注意を払いながら解読を進めていく必要があるといえよう。

## 謝 辞

本稿の論旨はすでに日本民族学会第20回研究大会で発表しているが〔八杉 1981〕、本稿では、さらに分析材料を加え、マヤ文字のもととなった言語について考察した。

本稿作成段階で、本館の吉田集而助教授、長野泰彦助手から貴重な助言を得た。厚くお礼申し上げます。

## 文 献

- ANDERS, Ferdinand (ed.)  
 1967 *Codex Tro-Cortesianus*. Akademische Druck u. Verlagsanstalt.  
 1975 *Codex Dresdensis*. Akademische Druck u. Verlagsanstalt.
- AULIE, Wilbur and Evelyn W. de AULIE  
 1978 *Diccionario Ch'ol-Español, Español-Ch'ol*. Instituto Lingüístico de Verano, México.
- BARRERA VÁSQUEZ, Alfredo (ed.)  
 1980 *Diccionario Maya Cordemex: Maya-Español, Español-Maya*. Ediciones Cordemex.
- BARTHEL, Thomas S.  
 1968 Historisches in den klassischen Mayainschriften.  
*Zeitschrift für Ethnologie* 93: 119-156.
- BRUCE S., Roberto D.  
 1968 *Gramática del Lacandón*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.
- GARCÍA DE LEÓN, Antonio  
 1979 Algunas consideraciones sobre los choles.  
*Estudios de Cultura Maya* 12: 257-287.
- GRAHAM, Ian and Eric VON EUW  
 1975 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions: Volume 2, Part 1*. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- HAESERIJN V., Esteban  
 1979 *Diccionario K'ekchi' Español*. Piedra Santa, Guatemala.
- HENNE PONTIUS, David (ed.)  
 1980 *Diccionario Quiché-Español*. Instituto Lingüístico de Verano, Guatemala.
- KELLER, Kathryn C.  
 1955 The Chontal (Mayan) Numeral System. *International Journal of American Linguistics* 21: 258-275.  
 1959 The Phonemes of Chontal (Mayan). *International Journal of American Linguistics* 25: 44-53.

- KELLEY, David H.  
1962 Fonetismo en la escritura maya. *Estudios de Cultura Maya* 2: 93-134.  
1976 *Deciphering the Maya Script*. University of Texas Press.
- KNOROV, Yuri V.  
1967 *Selected Chapters from the Writing of the Maya Indians*. Sophie Coc, trans., Russian Translations Series of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 4, Harvard University.
- LANDA, Diego de  
1959 *Relación de las cosas de Yucatán*. Angel María Garibay K. (ed.), Editorial Porrúa, México.
- LARSEN, Raymond S. and Eunice V. PIKE  
1949 Huasteco Intonations and Phonemes. *Language* 25: 268-277.
- LINGOLN, J. S.  
1942 The Maya Calendar of the Ixil of Guatemala. Contributions to American Anthropology and History, No. 38. *Carnegie Institution of Washington Pub. 528*, Carnegie Institution of Washington, pp. 97-128.
- LOUNSBURY, Floyd G.  
1980 Some Problems in the Interpretation of the Mythological Portion of the Hieroglyphic Text of the Temple of the Cross at Palenque. In Merle Greene Robertson (ed.), *Third Palenque Round Table, 1978, Part 2*, University of Texas Press, pp. 99-115.
- MCQUOWN, Norman A.  
1955 The Indigeneous Languages of Latin America. *American Anthropologist* 57: 501-570.
- OAKLEY, Helen  
1966 Chorti Grammar. In M. K. Mayers (ed.), *Languages of Guatemala*, Mouton, pp. 243-250.
- SCHUMANN G., Otto  
1971 *Descripción estructural del Maya Itzá del Petén, Guatemala C. A.* Centro de Estudios Mayas, Cuaderno 6, Universidad Nacional Autónoma de México.
- SMAILUS, Ortwin  
1975 *El Maya-Chontal de Acalan: Análisis lingüístico de un documento de los años 1610-12*. Centro de Estudios Mayas, Cuaderno 9, Universidad Nacional Autónoma de México.
- THOMPSON, J Eric S.  
1932 A Maya Calendar from the Alta Vera Paz, Guatemala. *American Anthropologist* 34: 449-454.  
1962 *A Catalog of Maya Hieroglyphs*. University of Oklahoma Press.  
1971 *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction. 3rd Edition*. University of Oklahoma Press.  
1972a *A Commentary on the Dresden Codex: A Maya Hieroglyphic Book*. Memoirs of the American Philosophical Society, 93.  
1972b *Maya Hieroglyphs without Tears*. The Trustees of the British Museum.
- ULRICH, Mateo and Rosemary de ULRICH  
1976 *Diccionario bilingüe: Maya Mopán y Español, Español y Maya Mopán*. Instituto Lingüístico de Verano, Guatemala.
- VILLACORTA, Antonio J. and Carlos A. VILLACORTA  
1930 *Códices Mayas*. La Tipografía Nacional, Guatemala.
- 八杉佳穂  
1980 「マヤ諸語の動詞核の比較研究」『ラテン・アメリカ研究』10: 121-173。  
1981 「マヤ文字とマヤ諸語」『日本民族学会第20回研究大会研究発表抄録』pp. 27-28。  
1982 『マヤ文字を解く』(中公新書) 中央公論社。